「新村出」と「嵯峨野高等学校」―校歌制定秘話―

川口　靖夫・多田　英俊

はじめに
一　発端 ― 三枚の写真は語る ―
二　校歌制定の経緯
（一）校歌制定・最初の試み
（二）新村出と矢代仁兵衛との接点
（三）作詞の完成
（四）作曲者の選定・依頼
（五）校歌誕生
三　嵯峨野高等学校校歌および卒業慶祝賀歌
（一）校歌・賀歌に詠みこまれた新村出の思い
（二）嵯峨野高等学校校歌（解説）
（三）卒業慶祝賀歌（解説）
四　新村出の来校
（一）校歌作詞感謝の会（昭和三十一年十一月二十一日）
（二）本館落成記念式典（昭和三十三年十月一日）
（三）矢代仁兵衛氏頌徳碑除幕式（昭和三十六年八月二十七日）
おわりに

はじめに

京都府立嵯峨野高等学校の校歌は、作詞・新村出（一八七六～一九六七）、作曲・團伊玖磨（一九二四～二〇〇一）という豪華版である。作詞者・作曲者の双方が著名な人物となると、作詞・吉川幸次郎（一九〇四～八〇）、作曲・芥川也寸志（一九二五～八九）になる府立洛北高校の校歌であろう。洛北と嵯峨野の校歌、この二つが京都の府立高校では双璧であると思う。

洛北高校と嵯峨野高校は、戦後の学制改革のなかで似たような運命をたどる。洛北高校は旧制京都第一中学校を前身とするが、昭和二十三年四月の学制改革で、洛北高校と改称され、校舎は京都市立洛北中学校に転用された。生徒は鴨沂高校（旧制府立第一高等女学校を改称）に収容、同年十月、高校三原則（男女共学・総合制・地域制）に基づく第二次高校再編成により、洛北高校は一旦消滅する。一方、嵯峨野高校の前身となる嵯峨野高等女学校は、昭和二十三年三月に廃校となり、一旦その歴史の幕を閉じ、校舎は京都市立嵯峨野中学校に転用された。生徒は洛北高校の生徒と同じく鴨沂高校に併合された。従って、昭和二十三年四月時点においては、鴨沂高校の敷地内には、鴨沂高校・旧嵯峨野高女の女子生徒（一七一〇名）、洛北高校の男子生徒（一四七三名）の計三一八〇名の生徒がひしめき合っていた(1)。

昭和二十五年四月一日、転用されていた洛北中学校・嵯峨野中学校が廃校となり、校舎は府に返還されることとなり、京都府教育委員会告示

京都府教育委員会告示第二十号

京都府立高等学校に関し次の通り設置した。

昭和二十五年四月四日

京都府教育委員会

開校年月日	校名	位置
昭和二十五年四月一日	京都府立洛北高等学校	京都市左京区下鴨梅ノ木町五拾九番地
〃	〃　嵯峨野高等高校	〃　右京区嵯峨野千代ノ道町弐拾三番地

図１　京都府教育委員会告示第二十号

嵯峨野高校の位置が現在の「京都市右京区常盤段ノ上町１５番地」ではなく「右京区嵯峨野千代ノ道町２３番地」とあるのが不可解である。

第二十号により、それぞれ洛北高校・嵯峨野高校として復元され、現在に至っている(2)。

嵯峨野高校の校歌の作詞者が新村出であり、作曲者が團伊玖磨であることは、嵯峨野高校の生徒・教職員にとっては周知の事実であるが、この両名がどのような経緯で作詞・作曲をするに至ったのかを知る者は恐らく誰もいない。筆者のわれわれとて同様であった。しかし、ほんの偶然といってもよい発見からわれわれは校歌制定の経緯を調べることに興味を持った。校歌制定から六十年程の歳月が流れ、校歌制定の経緯を活字として残して置くことも意味あることと考え、本稿を執筆することにした。なお、本稿においては敬称を省略させていただいていることをあらかじめお断りしておきたい。

一　発端―三枚の写真は語る―

平成二十四年三月、書架の大幅な配置替えを企図し、それに伴い資料室等を整理していたところ、多田が和服姿の老翁が写っている三枚の写真を発見した。ひと時代昔の嵯峨野高校の校庭及び講堂（体育館）で写されたものであることは想像がついたが、この人物が誰であるのか即座に分からなかった。しかし、胸に文化勲章を掛けていることがこの人物を特定する上での手掛かりとなった。嵯峨野高校の関係者で文化勲章を受章できるほどの人物と言えば、校歌作詞者の新村出以外思い浮かばない。早速、インターネットで新村出の画像を検索すると、間違いなく岩波『広辞苑』の編者・新村出その人であった。次いで、この写真が写された年月日を調べることとした。『嵯峨野高校10年誌』「1沿革　高等学校10年史」に「昭和31年11月21日　新村出氏講演（午後）」とあり、嵯峨野高校新聞部が発行した『嵯峨野新聞』第三十一号（昭和三十二年三月八日発行）に「三十一年度回顧録」として「十一月　校歌発表会新村先生御来校」と記す。また、『新村出全集索引』所収の「年譜」にも「昭和三十一年（一九五六）十一月二十一日　嵯峨野高校校歌作詞感謝の会に臨む」とあることから、まぎれもなくこの時の写真であると確信

図２「校歌作詞感謝の会」当日の新村出　昭和31年11月21日、文化勲章受章を記念して「校歌作詞感謝の会」が行われた。胸に文化勲章を掛けている。

図３「校歌作詞感謝の会」当日の新村出

図４　校歌を合唱する生徒

京都新聞（夕刊）　2012年(平成24年)5月11日　金曜日　（日刊）

嵯峨野高の校歌作曲

團伊玖磨さん直筆楽譜発見

京都市右京区の嵯峨野高でこのほど、作曲家團伊玖磨さん（1924～2001年）直筆の同高校歌の楽譜が見つかった。校歌の作詞者で、「広辞苑」の編者として知られる言語学者新村出さん（1876～1967年）が卒業生のために詠んだ短歌の色紙も発見され、学びやの歴史の一端に触れる資料に関係者は「学校への誇りを感じる」と喜んでいる。

新村出さん

團伊玖磨さん

同高によると、校歌は1954年の開校5周年を機に制定し、56年11月にお披露目式があった。

作詞　新村出さん短歌色紙も

楽譜はA3大。「嵯峨野高校校歌　1955」「嵯峨野高校校歌　作詞新村出　作曲團伊玖磨」と記し、團さんが歌詞を平仮名で4番まで書き添えている。

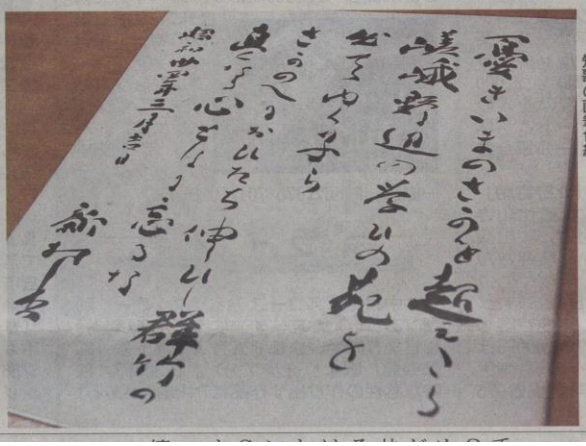
色紙には「憂きいまのさかを超えたる嵯峨野辺の学びの苑を出でゆく子ら」「さがの竹の直ぐなる心とはにへにおひたち伸びし群忘るな」と墨書され、「昭和卅四年三月吉日　新村出」と署名がある。

いずれも、同高の事務室書庫や図書資料室を整理中に職員が見つけた。團伊玖磨全作品管理者の早崎日出太氏と新村出記念財団（北区）が直筆と確認。新村さんが卒業生のために短歌を詠んだとの記録が財団に残っており、はなむけの短歌と判明した。

校歌完成までの経緯を記した書簡や、お披露目式のものとみられる新村さんの写真も見つかった。楽譜や色紙、写真は同高の図書室に展示している。

斉藤和彦校長（54）は「高名な方々が関わった学校の歴史が分かり、うれしい。生徒にも将来、この学校で学んだことに誇りを感じてもらえれば」と話している。（山田修裕）

嵯峨野高で見つかった團伊玖磨さん直筆の楽譜（京都市右京区）


嵯峨野高の卒業生のために、新村出さんが詠んだ短歌の直筆色紙

嵯峨野高校歌（1番）

明けゆけば　近き山脈
紫に　あやにかがよひ
山峡に　雲湧き起こる
畑中に　立ちて想へば
諸人の世々培へる
営みの　息吹きぞ深し
我等讃ふ
あゝ　わが嵯峨野
あゝ　わが母校

京都新聞
夕刊
京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
© 京都新聞社 2012年
発行所　〒604-8577
京都市中京区烏丸通夷川上ル
☎直通 075(241)
社会報道部 6119　運動部 6129
文化報道部 5429　写真映像部 6135
地域報道部 6117　読者応答室 5421
番号案内 総合受付 075(241)5430
ご購読・配達は 0120-464-468
滋賀本社 077(523)3131

京仏壇・京仏具
株式会社 間遠佛具店
京都市下京区万寿寺通麩屋町東
☎(〇七五)三五一―八三四七(代)
http://e-joho.org/matou/

◆有名作曲家と広辞苑編者が手がけた楽譜と色紙、嵯峨野高で発見。竹のように育てと。

◆白物、パソコン…規模拡大で価格ダウンなら歓迎だが。家電量販業界に再編の大波。

三十六峰

◆切り…に。橋…の難航。

◆危機は…リシャで…神話の…

図５　『京都新聞・夕刊』（平成二十四年五月十一日付）

した。図書館に所蔵されていたのは、この三枚の写真だけであったが、他にも貴重な資料が埋もれているのではないかと、これを契機に、校長室、事務室、保管庫、階段下倉庫など校舎内を隈なく探したところ、團伊玖磨直筆の校歌楽譜、昭和三十四年三月の本校卒業生に対して新村出が揮毫した慶祝賀歌色紙、新村出の額装写真等が見つかった。なかでも校長・斉藤和彦（現、府教委指導部高校教育課長）が校長室の天袋より新村出が当時の校長・中南忠雄に宛てた書簡（封書六通・葉書七葉）を見つけ出したことは、本稿を執筆するうえで無くてはならない発見となった。なお、團伊玖磨楽譜・新村出色紙ともに本人の直筆であると思ったものの、確認のため楽譜に関しては、團伊玖磨の全作品を管理している埼玉県在住の早崎日出太に鑑定を依頼し、團伊玖磨直筆と確認された。新村出の色紙に関しては、新村出記念財団に持参して鑑定してもらった結果、新村出直筆に間違いないと確認していただいた。

四月に入り、新年度も始まるなか、さしあたって図書館のオリエンテーションで新入生に紹介しようと、不明な点があるものの「校歌、誕生」というテーマで図書館内に関係資料を展示した。その後、京都新聞社の取材を受け、『京都新聞・夕刊』（平成二十四年五月十一日付）トップに「嵯峨野高の校歌作曲　團伊玖磨さん直筆楽譜発見　作詞新村出さん短歌色紙も」という見出しで掲載された。職場の同僚の間では、新聞発表されたことで一話完結という雰囲気が漂っていたが、われわれにとっては、ここがスタートラインであり、解明しなければならない問題が山積していた。具体的に言えば、新村出に作詞、團伊玖磨に作曲を依頼することになった経緯、校歌の作詞及び作曲が完成した年月日、新村出がどのような思いを込めて校歌を作詞したのか等々である。新村出の書簡は極めて判読しづらいものであったが、公益法人陽明文庫　理事・文庫長名和修（嵯峨野高校卒業生）の御助力を得て判読することができた。以下、その書簡の内容をふまえつつ他の資料をも参考に、嵯峨野高校の校歌が制定されるに至る経緯を時系列に沿って記したい。不明な点も多くあるが、不明な点は不明と記し、後学の徒を俟つことにしたい。なお、本文でも触れるが、新村出にとって短歌を詠むことは、日常的な営みであった。多田による「新村出と短歌―内藤湖南・柳田國男との交流から―」と題する論考が本誌に掲載されているので、そちらの方も併せて参照していただきたい。

二　校歌制定の経緯

（一）校歌制定・最初の試み

嵯峨野高校は、昭和十六年四月一日、室町の西陣織の老舗「矢代仁」の第七代目当主・矢代仁兵衛（一八九三～一九七六）の寄付金により創設された嵯峨野高等女学校を前身とする(3)。先述した如く、戦後の学制改革の中で、嵯峨野高女は一旦廃校となり、校舎は嵯峨野中学校の独立校舎として転用され、昭和二十五年三月、嵯峨野中学校が廃校となり、翌四月、校舎は嵯峨野高校として復元された(4)。復元なった嵯峨野高校に対して嵯峨野高女初代校長（当時、西京高校校長）・片岡仁志（一九〇二～九三）は「唯感慨無量です。本校設立来の根本精神である『和と敬』を重んじ、恵まれた自然の中ですくくとのび、高い教養と模範的学園の出来る事を大いに期待し又その実現を信じて居ます」（『嵯峨野高校新聞』号外第一版、昭和二十五年四月十日発行）というメッセージを送っている。

嵯峨野高校の初代校長には、市立堀川高校教頭の中南忠雄（一九〇八～二〇〇九）が任命された。市立から府立への異動（それも管理職の異動）を奇異に思われるかもしれないが、昭和二十三年十月、新制高校が再編成された時、大規模な府市の人事交流があった。その時の状況を『京都

新聞』（昭和二十三年十月十七日付）は「新制高校教員大移動　総数七百八人　画期的な府市交流人事」の見出しをつけて大きく報道している。これほどの大規模な交流ではないが、その後も府市の人事交流があったようで、当時としは珍しいことではなかった。

さて、校長として赴任した中南忠雄は、昭和二十五年一月に校歌・生徒歌を制定すべく公募を行った。

① 締切　二月十五日
② 生徒・教員より募集
③ 審査は職員の代表及び生徒五人で行う
④ 優秀作各一篇賞金五〇〇円、佳作各三篇賞金一〇〇円

というのが、その時の募集要項である。しかし、校歌・生徒歌の応募は一篇しかなく、審査の結果、選外となり校歌の制定は後日に期されることになった。その後、校歌を制定しようとする動きは見られないが、嵯峨野高校創立五周年を機に中南忠雄は、その記念事業の一環として校歌の制定を決意した。中南忠雄にとって校歌とは「生徒の魂たるべき」（書簡⑥―文末の《資料編・書簡一覧》参照、以下同じ）ものであり、校長在任中に何としてでも制定したかったのではないか。前回の公募では応募が少なく頓挫したことの反省に立ち、今回は公募でなく校歌の作詞者として相応しい人物に依頼することとした。嵯峨野高校の創設者・矢代仁兵衛と交遊の深かった新村出である。

（二）新村出と矢代仁兵衛との接点

新村出がその書簡の中で「矢代氏の高嘱にも應へたく」（書簡③）と記していることから、矢代仁兵衛を介して新村出に校歌の作詞が依頼されたことは間違いない。それでは、新村出と矢代仁兵衛の接点はどこにあるのだろうか。昭和二十六年八月、府立図書館を舞台に「流水会」という同好会が誕生した。当時の図書館長西川精一（一九〇六～八一）・岩井武俊（一八八六～一九六三）・新村出（一八七六～一九六七）・内藤乾吉（一八九九～一九七八）・神田喜一郎（一八九七～一九八四）の五名が図書館で漫談会を始めたことに端を発する会で、流水会という名称は新村出の命名である。嘗て川口は、矢代仁兵衛が当初より流水会に出席していることから、この流水会で新村出と矢代仁兵衛の交遊が始まったのではないかと推測した⑸。しかし、その前年、昭和二十五年十月の新村出に宛てた矢代仁兵衛の書簡に「去年秋娘佳婚の節にハ有難き御詞を頂き早や一年にも相成り候」（書簡①）という文言があることが判明し、少なくとも昭和二十四年には交遊があったことが確認できる。結局のところ、新村出と矢代仁兵衛の接点は不明のままである。

次いで、新村出に校歌の作詞を依頼した時期について触れておく。依頼年月日を明確に記す資料は存在しないが、嵯峨野高校創立五周年記念事業の一環であることを考えれば、昭和二十九年度に入ってからのことであると思われる。正式には、中南忠雄から新村出に依頼されたと思われるが、中南忠雄の意を受けた矢代仁兵衛が新村出に事前に流水会の席上等において、打診をしていた可能性もある。この時期、新村出が流水会に出席した月日を「年譜」（『新村出全集索引』所収）から拾えば、

五月十三日　流水会にゆき、京展を見る。
六月十九日　岡崎図書館の流水会に出ず。
八月　四日　無隣庵の流水会（二八回）に出席。

となるが、果たしてこの場で校歌の話が出たのかどうか、確認することはできない。

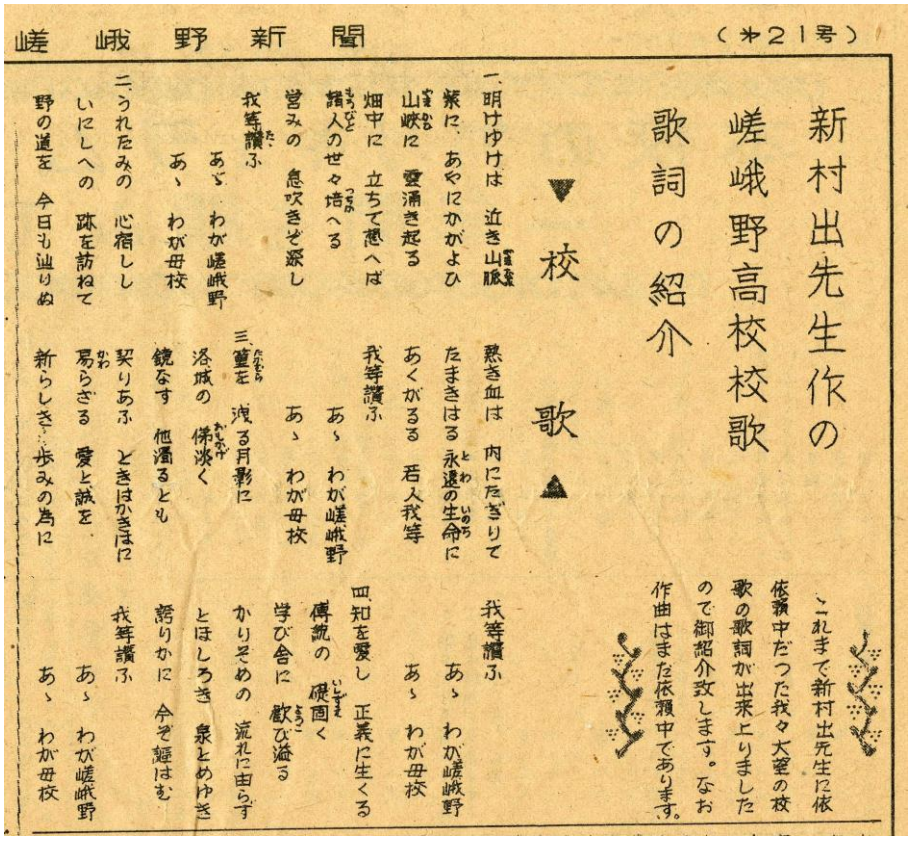
（三）作詞の完成

喜寿にして初めて校歌の作詞という依頼を受けた新村出の意気込みは

並大抵のものではなかった。昭和二十九年、公募によって京都市立紫野高校の校歌が決まった時、新村出は、その入選歌詞に強い関心をもった。昭和二十九年九月二十二日、校歌作詞者・東辻保和（当時、紫野高校教諭）を訪ね、合唱部の生徒により校歌を聴かせてもらい、数日後、その感激を短歌に残している（書簡②）。また、校歌を作詞するに当たり、嵯峨野の風土・景色を実際に自らの目で確認しようと、東辻保和を伴い嵯峨野高校界隈を見て回っている(6)。

昭和二十九年十月十五日、創立五周年記念式典が挙行され、当然のことながら新村出にも招待状が出されたが、新村出は九日付け封書で、「本月初めより俄かの冷氣のため風邪ニかゝり咽喉を痛め静養中」（書簡③）であることを理由に欠席する旨、連絡をしている。しかし、この時に「客を謝絶し一向専念の上、修辭に意を盡くしつゝ構想を完うし、天來の妙趣を綴り申して、各位の御期待に反かざらむやう」（書簡③）校歌の作詞に専念したいと伝えている。「先月以來再度嵯峨野逍遙をいたし又貴校のふんゐ氣にもひたり且又風土史蹟などを大観いたし」（書簡③）とあることからも分かるように、校歌は机上でのみ作詞がなされたのではなく、実際に嵯峨野高校にまで足を運び、学校の雰囲気をも肌で感じ取った上での作詞である。校歌歌詞の中に嵯峨野の情景が詠いこまれていることからも理解できるであろう。このことは当時の生徒も実感したようで、伊吹文明（嵯峨野高校卒業生・現、衆議院議長）は、「田園のなかに建つ学舎で、西の愛宕、東の双ヶ岡、比叡が遠望でき、畑のなかを歩いて登下校した姿そのままの歌詞」と感じたと云う(7)。

さて、「本月末までには、試作案を一往お目にかけ得るかと存じてをります」（書簡③）という約束どおり初稿が完成したようで、「近々校歌の試作初稿をお見せ申したく、又同時に作曲のことにつき、御相談もしてみたく候間、十一月一日（月）、二日（火）あたりの午後に前ぶれのお電話ニて御照會の上、御來談下さるやう」（書簡④）、十月二十九日付葉書で中南忠雄に伝えている。しかし、中南忠雄の方に都合がつかなかったようで、「六日七日の土曜日曜両日をすぎ来週、月、火等の午後早ゝにでも、一往お電話ニて御照會の上、御出向のやう願置候」（書簡⑤）と日を改めている。連絡を受けた中南忠雄は、早速、新村出宅に出向き校歌を受け取った。何時か。新村出は「来週、月（八日）、火（九日）午後にでも御出向」と伝えたが、十一月九日付中南忠雄の礼状には「先日



（第21号）　嵯峨野新聞

新村出先生作の嵯峨野高校校歌

歌詞の紹介

これまで新村出先生に依頼中だつた我々大望の校歌の歌詞が出来上りましたので御紹介致します。なお作曲はまだ依頼中であります。

▼校歌▲

一、明けゆけは　近き山脈
紫に　あやにかがよひ
山峡に　雲湧き起る
畑中に　立ちて想へば
踏人のせゝ培へる
営みの　息吹きぞ深し
我等讃ふ
あゝ　わが嵯峨野
あゝ　わが母校

二、うれたみの　心宿しし
いにしへの　跡を訪ねて
野の道を　今日も辿りぬ
熱き血は　内にたぎりて
たまきはる　永遠の生命に
あくがるる　吾人我等
我等讃ふ
あゝ　わが嵯峨野
あゝ　わが母校

三、雲を　洩る月影に
洛城の　佛淡く
鏡なす　他潟るとも
契りあふ　ときはかきぼに
易らざる　愛と誠を
新らしき　歩みの為に
我等讃ふ
あゝ　わが嵯峨野
あゝ　わが母校

四、知を愛し　正義に生くる
傳統の　硬固く
学び舎に　歓び溢る
かりそめの　流れに由らず
とほしろき　泉とめゆき
鶴りかに　今ぞ蹶はむ
我等讃ふ
あゝ　わが嵯峨野
あゝ　わが母校

図６　『嵯峨野新聞』第二十一号（昭和二十九年十二月二十日発行）

は参上致し豫て御願ひに及びました本校ゝ歌として御立派なる御玉詞賜はり且つ本校の為過分なる御芳志の数ゝ拝承いたし誠に感激の至りに存じたる次第で御座います」（書簡⑥）と記している。とすれば、八日には受け取っていることになる。ただ「先日は」と記していることが気にかかる。八日に受け取って、九日付の手紙に「先日は」と記すであろうか、八日であれば「昨日は」と記すのが普通と思うのだが。すでに校歌の初稿が完成していることは分っていることから、一日でも早く中南忠雄は校歌の初稿を見たかったはずであり、新村出が指定した日よりも早く出向いたのではなかろうか。

完成した校歌の歌詞は、『嵯峨野新聞』第二十一号（昭和二十九年十二月二十日発行）紙上で発表され、生徒に披露された。「これまで新村出先生に依頼中だった我々大望の校歌の歌詞が出来上がりましたので紹介します。なお作曲はまだ依頼中であります」と記されている。

（四）作曲者の選定・依頼

作曲者についても新村出の支援を仰いでいる。中南忠雄に校歌の歌詞を手渡した数日後、新村出は親戚筋に当たる作曲家・諸井三郎（一九〇三～七七）に作曲について配慮してほしい旨、書簡を送っている（十一月上旬の頃か？）。諸井三郎が昭和二十五年十月に佐賀県立唐津高等学校（現、唐津東高等学校）の校歌を作曲していることもあり、新村出は諸井三郎自身に作曲の依頼をしたのではないかと思われる。しかし、十一月下旬になっても諸井三郎から返答がない。十一月二十五日、矢代仁兵衛と石川春之助（育友会会長）が同伴で新村出宅へ校歌作詞に対する御礼に赴いた時、新村出はこの二人に「諸井三郎より何等通信ニ接せず心もとなき」とやや不安な胸のうちを伝えている（書簡⑦）。二十七日に諸井三郎の妻から返信が遅れている理由が記された葉書を受け取り、その中に「遠からず返事をよこす」と記されており、新村出は胸をなでおろした。十二月一日、諸井三郎より委嘱候補の作曲家二名が推薦されてきた。柴田南雄（一九一六～一九九六）と團伊玖磨である。共に諸井三郎の弟子で、柴田南雄、三十五歳、團伊玖磨、三十歳、という新進気鋭の作曲家である。新村出は、前者（柴田）に先ず委嘱し、拒否されたら後者（團）に委嘱してはどうかと記しているが、新村出にとって、柴田・團ともに「小生未知未識にて、斯界の新人」であり、単純に諸井三郎が記した順に委嘱しては如何かと意見を述べているに過ぎない。また、紫野高校の校長にどのような手順で作曲を頼み、どのぐらい日時が掛かるかを聞いては如何かと助言している（書簡⑧）。十二月四日には、諸井三郎より送られてきた柴田・團の詳しい情報が新村出を通して中南忠雄に伝えられ、新村出は「いづれを選ばるゝかも何ら意見無之候も、若し〳〵京都市内の音楽家等に就きて御相談の上、御評議ある方むしろ妥當かと存候」（書簡⑨）との意見を述べている。結果的には團伊玖磨に依頼することになるのだが、その間の経緯は不明である。作曲家に依頼する前に、歌詞にフリガナを附し、念の為、検閲再吟味がしたいので、近日中に校長、副校長、国語科主任教師のうち誰か一名の来訪を希望するという、念の入れようである。

團伊玖磨に作曲を依頼することが決まり、中南忠雄は諸井三郎にどれほどの作曲料を支払えばいいか問い合わせている。諸井三郎から「依頼者が高校ですから、予算等率直におっしゃって御依頼になれば結構と思います。団君へは私の名刺を同封しておきますからよろしく御使用下さい」（書簡⑩）という返信が届く。消印（東京中野）は十三日であるから、十五日、十六日ぐらいに中南忠雄はこの手紙を受け取り、直ちに團伊玖磨に諸井三郎の名刺を添えて正式の依頼状を発送したと思われる。

それでは團伊玖磨に支払われた作曲料はどれほどだったのだろうか。正確な金額は分からないが、大体の金額は推測できる。開校五周年記念

式典を挙行するにあたり、昭和二十九年七月に記念事業委員会が設置され、委員諸氏の献身的な協力により、僅か二ヵ月という短期間で五七九名から総額二十一万四千八百五十円の募金が集まり、予算が組まれている⑻。その中に「校歌作成費」（作曲、並に発表演奏会を含む）として「五万円」が計上されている。発表演奏会を仮に「一万円」とすれば作曲料は「四万円」となる。既に諸井三郎から「依頼者が高校ですから、予算等率直におっしゃって御依頼になれば結構と思います」（書簡⑩）という助言もあり、作成費総額の「五万円」を超えることは無かったと思われる。校歌作成費に作詞料が含まれていないのは、作詞は最初から新村出の好意によるものであったからである。なお、作曲料は、現在の金額に換算するとどれくらいだろうか。森永卓郎監修『明治・大正・昭和・平成　物価の文化事典』（展望社、二〇〇八）に拠れば、昭和二十九年度の東京都の公立小学校の初任給は七千八百円であり、作曲料を「四万円」とすれば、約五倍。平成二十二年度の初任給は二十四万一千円であり、五倍して、約百二十万円となるが、あくまで試算に過ぎない。

中南忠雄の依頼状とほぼ同時期に新村出も團伊玖磨に懇切丁寧な依頼状を送付している。いわば側面支援といってよい。実物は残っていないが、新村出が中南忠雄に宛てた書簡の中に「團伊玖磨ニ作曲を依頼する書状」（書簡⑪）として新村出が学生に筆写させたものが残っている。その書簡によれば、新村出は團伊玖磨に「小生の古典趣味」及び「京都の地方性」の上より「典雅にのみ作詞」したと伝え、「同校の爲に優秀な詞曲となりて永く師徒父兄等を感喜せしめ、嵯峨野の雅致と相俟つて、京都内外遠近に響かせたい」とその願望を熱く語る。そして最後に「冀くは、この未熟なる小生の処女作たる校歌をして、御無理かと存じつゝも、貴下の御協力に依りて（小生としては僭越の至りながら）詞と曲と双美の域に達せしめるやう格段の御厚配をねがふのでございます」（書簡⑪）という文面から、新村出自身、会心の作であると思っていたと、理解してよかろう。

新村出からも團伊玖磨に依頼状が送付されていることを知った中南忠雄は「諸井先生の御紹介と申し特に先生の御懇篤なる御言葉添を頂きしことゝて必ずや御承引賜はることと信じ」（書簡⑫）、期待に胸を躍らせつつ團伊玖磨からの作曲承諾の朗報を待つなか、昭和二十九年も暮れようとしていた。

（五）校歌誕生

年が明けて昭和三十年一月の中旬になっても、團伊玖磨から承諾の返事は来なかった。新村出は、諸井三郎宛年賀葉書に「一言あちら（團氏）へよろしく言葉添へをして、承諾してくれるやうに希望すると」と記し諸井三郎に支援を求めていることを伝えるとともに、團伊玖磨から「何の手ごたへハありません。いさゝか氣がゝりニもなり一言申上げておきます」（書簡⑬）と、中南忠雄宛年賀葉書に記している。

昭和三十年一月二十三日、新村出に團伊玖磨から「返事がおくれたのは、新曲の「オペラ」構成中なりしため」であり、「二月の初めころには新作曲（校歌の）を送る筈」という書簡が届く。「この吉報ニ接し、老人甚だうれしく存じました」（書簡⑭）という文言に新村出の安堵と喜びが溢れている。なお、この新曲の「オペラ」とは「聴耳頭巾」（三幕・木下順二作）のことである。恩師諸井三郎の紹介状があり、かつ、新村出から直々に依頼状を受け取った團伊玖磨にしてみれば、校歌の作曲を断る理由は何もなかった。同時期に中南忠雄宛にも團伊玖磨から「校歌の作曲大へんおくれましたが今月末か二月早々にお送り申し上げますつもりでございます」（書簡⑮）と記した年賀状が届く。

新村出と中南忠雄は、校歌の楽譜が送付されてくるのを首を長くして待った。しかし、二月が過ぎ三月に入っても楽譜は送られてこない。新

村出は、三月六日の卒業式までに校歌が完成し、卒業式において校歌を聴くことができるものと期待していた。三月三日付中南忠雄宛封書には、六日の卒業式の欠席連絡に加えて、「團氏よりの作曲未着のこと」、「もハや六日の御用ニハ立ち申すまじく遺憾無上ニ存候」、「かへすゞもざんねん千万ニ存候」とその落胆ぶりを示している(書簡⑯)。

年度が改まり、昭和三十年四月になっても楽譜は送られてこない。日頃穏やかな新村出も流石に業を煮やしたのか、「積日の鬱憤もだしがたく、如何ニいたさば、よろしかるべきかと苦慮」している(書簡⑰)。年度が改まれば、「決して敢て遂行をいそぎし儀にてもなく」今後の対策を相談したいと伝えている(書簡⑰)。

四月が終わり、五月に入って一週間ほど経った頃、ついに團伊玖磨から楽譜が送られてきた。校歌作詞完成からほぼ半年後、ここに嵯峨野高校校歌は、誕生したのである。

卒業式で最初に校歌が斉唱された年月日を確認しておく。第四回（昭和三十年三月六日）・第五回（昭和三十一年三月八日）卒業證書授与式において参列者に配布された式次第が残っている。共に校歌歌詞が記載されているが、第四回卒業式では作曲が間に合わず、歌おうにも歌うことができなかった。卒業式で初めて校歌を声高らかに歌うことができたのは、第五回卒業生になる。因みに卒業式で斉唱されたのは、第四回卒業式では「仰げば尊し」・「蛍の光」、第五回卒業式は「校歌」・「蛍の光」であった。平成二十四年八月十二日に京都ブライトンホテルで挙行された「嵯峨野高校同窓会総会」において第五回卒業生の人々が「われわれが卒業式で最初に校歌を歌った学年である」と異口同音に話されたことにより確認している。

團伊玖磨が校歌の楽譜を入れて投函した封筒の消印は、昭和三十年五月七日である。その数週間後の五月二十五日、岩波書店から『広辞苑』初版が出版された。嵯峨野高校校歌と『広辞苑』とは同じ時期に誕生したことになる。嵯峨野高校の校歌作成を通して團伊玖磨は、新村出に親近感を持ったに違いない。團伊玖磨は「日本の辞典は良いですよ。僕は新村さんの広辞苑を愛用していますが、面白くて面白くて、毎晩必ず数頁を読み乍ら眠る」ほど、『広辞苑』の大ファンとなった⑨。

新村出が校歌以外に嵯峨野高校生に残したものに、昭和三十四年三月に卒業した生徒に対して詠んだ慶祝賀歌がある。章を改めて校歌と賀歌について記すこととする。

三　嵯峨野高等学校校歌および卒業慶祝賀歌

（一）　校歌・賀歌に詠みこまれた新村出の思い

嵯峨野高等学校校歌および卒業慶祝賀歌を解説するにあたり、歌詞と短歌に詠み込まれた新村出の思いを確認するため、校歌の作詞を引き受ける直前の年代以降、賀歌が制作された年までに詠まれた短歌を、『新村出全集』第十五巻所収「白芙蓉」（昭和四十三年四月、新村出の一周忌にあたり、その和歌の遺稿のうち、昭和二十七、八年から同四十年に至る作品を選抄したもの）から読み、校歌および賀歌によみこまれた内容と関係が深いと思われる作を列挙した。

昭和二十七・二十八年

ア　入学にはや卒業に孫どもの平凡ごともよろこぶ老いか

昭和二十九年・三十年

イ　恥づらくはわが老いらくに古めける観念の歌しばしばよむも

ウ　今の世のあたらしき人わかき人月にはなどかひややからしき

昭和三十一年
さにづらふ乙女ひとづまわが前に見つつ語れば老いも若やぐ　**エ**
険しかる今の世にしも在り経つつありがたしとふ言の葉あぢはふ　**オ**
在りがたく在りやすからぬ世の中に庭の青樹の冬芽萠えつつ　**カ**

昭和三十二年
自然愛人生愛にわれは生く他愛自愛にいまいのちあり　**キ**

昭和三十三年
受賞せる新進の士に大前の拍手ひびきて春のどかなり　**ク**

昭和三十四年
いそのかみ古き心に身を置きて進みすぎたる浮世忘れむ　**ケ**
百とせをながらへがたき人の身に千代の憂へをわれもするかな　**コ**

これらの短歌により、以下の三点が新村出の思いの素地をなすものとして整理されよう。

一点目は、**オ**「険しかる今の世」、**カ**「在りがたく在りやすからぬ世の中」、**コ**「千代の憂へ」とあるように、この世を憂き世としてとらえるものである。そこには、**イ**「観念の歌しばしばよむ」という姿勢も関わって来ようが、これは、「少壮十五歳ころから、郷里静岡において養父母から、淘道を教へられて、淘歌で仕込まれて、性格淘冶の自修にも導かれ、且つ心学の道歌に由つて自己を認識しつつ修行することを家庭で経験したので」（「『情延荘』序」昭和四〇年二月、『新村出全集』第一五巻三三八頁）とあるように、新村出にとっては青少年期より慣れ親しんだ形式と言える。それに加えて、**ウ**「今の世のあたらしき人わかき人～ひややか」、**ケ**「進みすぎたる浮世忘れむ」とある、文明昂進した現世への忌避的感情も考慮に入れる必要がある。それは単に、老人の懐古に伴う反動ではなく、現代に向けられた冷静な批判的視点として押さえられるべきである。なお、新村出には「自然には恒に克服せられつゝ克服せると誇る人間」との詠歌もある。

二点目は、後生すなわち若者に対する肯定的希望的心情である。**ク**「受賞せる新進の士～春のどかなり」の歌がその典型であるが、**ア**「孫どもの平凡ごともよろこぶ」ように、八十路翁新村出の眼には、すべて孫のごとく映ったに違いない。**エ**「乙女ひとづま～老いも若やぐ」もまた、率直かつ微笑ましい詠みぶりである。

三点目は、自然と人為は一体化し、自己他者関係の中で人は生かされているとする思いである。**カ**「庭の青樹の冬芽萠えつつ」と詠まれた下の句は、上の句の観念世界を形而下の現実「いま・ここ」にしっかりと結びつけているし、**キ**「自然愛人生愛～他愛自愛」とは、それがとりもなおさず新村の人生そのものであったことを如実に示す歌なのである。

（二）嵯峨野高等学校校歌（解説）

歌人で生物学者でもある永田和宏（嵯峨野高校卒業生）が「甲子園でよく聞く校歌とは一味違う⑽」と評した嵯峨野高校の校歌を次に紹介し、その解説を試みる。

《嵯峨野高校校歌》

一　明けゆけば　近き山脈
　　紫に　あやにかがよひ
　　山峡に　雲涌き起こる
　　畑中に　立ちて想へば

諸人の　世々培へる
営みの　息吹きぞ深し
我等讃ふ　あゝ　わが嵯峨野
我等讃ふ　あゝ　わが母校

二

うれたみの　心宿しし
いにしへの　跡を訪ねて
野の道を　今日も辿りぬ
熱き血は　内にたぎりて
たまきはる　永遠の生命に
あくがるる　若人我等
我等讃ふ　あゝ　わが嵯峨野
我等讃ふ　あゝ　わが母校

三

篁を　残る月影に
洛城の　俤　淡く
鏡なす　池濁るとも
契あふ　ときはかきはに
易らざる　愛と誠を
新らしき　歩みの為に
我等讃ふ　あゝ　わが嵯峨野
我等讃ふ　あゝ　わが母校

四

知を愛し　正義に生くる
伝統の　礎固く
学び舎に　歓び溢る
かりそめの　流れに由らず
とほしろき　泉とゆめき
誇りかに　今ぞ謳はむ
我等讃ふ　あゝ　わが嵯峨野
我等讃ふ　あゝ　わが母校

〔語釈〕

一番

・「あやにかがよひ」…「奇に耀ひ」何とも不思議なまでにきらきらとゆれて光り。
・「諸人の」…「の」は主格を示す。多くの人が。
・「息吹き」…活動の気配。生気。

二番

・「うれたみ」…「ウラ（心）イタ（痛）ミの約」嘆かわしく思うこと。
・「たまきはる」…「魂きはる」枕詞、ここでは「生命」にかかる。
・「あくがるる」…「憧る」本来いるべき所を離れて遠く去る。その対象である「永遠の生命」とは、自己の不老不死ではなく、過去から現在そして未来へ連綿と受け継がれてゆく人間の命の繋がりを意味する。

三番

・「篁」…「竹叢」竹の林。たけやぶ。
・「洛城」…京都を中国の洛陽城に比した表現。
・「ときはかきはに」…「常磐堅磐に」とこしえに。永久不変に。

四番

・「とほしろき」…雄大な。偉大な。

・「泉」…「出水」地中から湧き出る水。また、その場所。

・「とめゆき」…「尋め行き」たずねもとめてゆき。

［補注］

形式…五七調。歴史的仮名遣い。一番～三番は前半が自然の景、後半が人事の情となっており、その景は順に朝・昼・夜の時間におけるものである。四番の前半は高校の姿が描かれている。

構成…前半の一・二番は、嵯峨野辺の自然の風景に存在する、人間の日々の営みの歴史の中へ自己を置き、思いを馳せそして新たにするという形をとる。「生きかわり死にかわりして打つ田かな」（村上鬼城）という句（貧農に対する嘆きの表出とのみとらえるのは卑小）も思い起こされよう。また、いわゆる知識人として民を慈しむという、「スフィンクスは大きかりけり古き民これを造りて心なごみきや」（斎藤茂吉）の歌と通底するものも、そこにはあるだろう。

後半の三・四番は、不易流行をその基とみることができる。「不易流行」とは、芭蕉がその俳諧において、不易は詩の基本である永遠性、流行はその時々の新風の体、共に風雅の誠から出でて、その根元は一であると説いたものである。ここではそれを、愛と誠や愛知（哲学）と実践（倫理）という不易、「僕の後ろに道は出来る」（高村光太郎）のごとき雄大かつ清新な未来志向という流行が、ともに真理を探求する姿として歌われているのである。

（三）卒業慶祝賀歌（解説）

昭和三十四年三月、嵯峨野高校第八回卒業生に対して、新村出は、慶祝賀歌二首を色紙に揮毫し、その門出を祝っている。何故、昭和三十四年の卒業式か。昭和三十四年の卒業式が中南忠雄にとって校長として臨む最後の卒業式となることが分かっており、中南忠雄が新村出に無心をしたのではなかろうか。この昭和三十四年三月七日の卒業式に新村出が出席したかどうかは分からない。

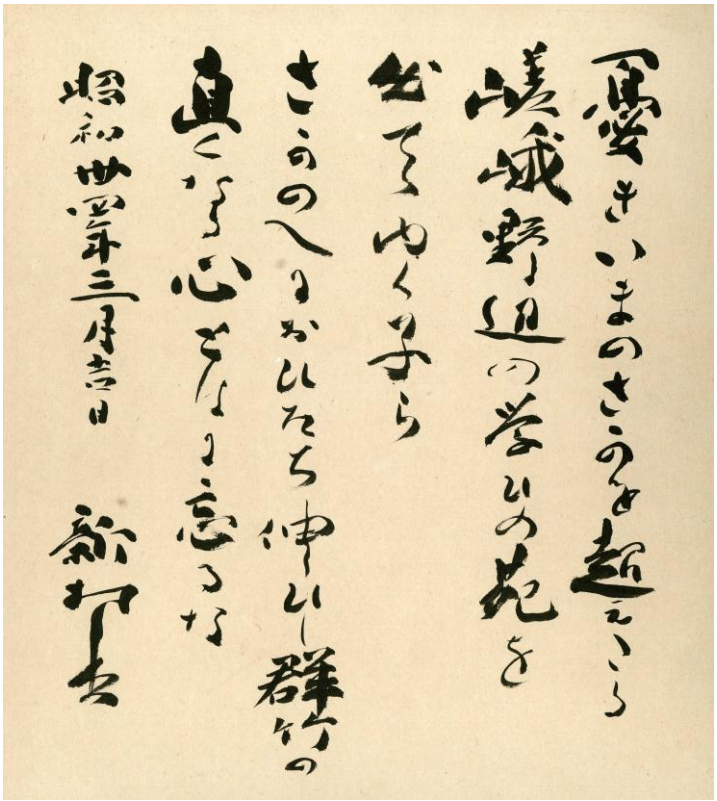


図７　新村出筆　慶祝賀歌色紙（昭和三十四年三月吉日）

［釈文］

第一首

憂きいまのさかを超えたる
嵯峨野辺の学びの苑を
出でゝゆく子ら

第二首
さがのべにおひたち伸びし群竹の
直ぐなる心とはに忘るな

〔通釈〕
第一首
つらい今という坂をのり越えた
嵯峨野の原の学園を
卒業してゆく子どもたちであるよ
第二首
嵯峨野の原に生長し伸長した群生竹のように
真っ直ぐな心を永久に忘れるな

〔補注〕
第一首
・二句「さかを超えたる」は、嵯峨野高校が地名「段ノ上町」の示すとおり、台地の上にある嵯峨野に立地していることを踏まえている。また、三年間の学園卒業という修業も念頭に置いた表現である。三行書きにしてあることもあり、この連体形が単純に「嵯峨野辺」の修飾とならないよう通釈した。
・二句「さかを超えたる」と三句「嵯峨野辺の」は頭韻を踏んでいる。
・五句「出でゝゆく子ら」は体言止めであり、詠嘆の意を含む。「卒業してゆく子どもたち」で通釈を止めれば、それは短詩型文学ではなく単なる事実提示となる。
第二首
・三句「群竹の」の「の」は比喩の用法である。

四　新村出の来校

（一）校歌作詞感謝の会（昭和三十一年十一月二十一日）

昭和三十一年十一月三日、新村出が文化勲章を受章したことの祝賀も兼ね、二十一日午後一時、新村出を招いて「校歌作詞感謝の会」が挙行された。翌日の『京都新聞』に、この時の様子が掲載されている。文献によりその名称が、「校歌発表会」（『嵯峨野新聞』）、「校歌作詩感謝の会」（『京都新聞』）、「校歌作詞感謝の会」（『新村出全集索引』）と違いがあるが、今は『新村出全集索引』に従う。

生徒に対して新村出は「知性をみがき大いに健闘してください」とさとすように講演、生徒から贈られた「肩掛け、電気座ぶとん」を手に目に涙したという。翌年正月の年賀状に「校歌の合唱ニハわれながらその音調に感激し感泣いたしました」とこの時の気持ちを伝え、「わが作とおもハれぬまでその調のよく整ひてこゝろ高みぬ」（書簡⑱）と即興で一首詠んでいる。

校歌の作詞及び作詞感謝の会を通して、新村出と嵯峨野高校との関係はより一層の親密さを増し、その後、記念式典、卒業式等には必ず新村出を来賓として招いている(11)。これ以後、新村出が嵯峨野高校に来校したことが確認できるのは、現在のところ次の二回である。

（二）本館落成記念式典（昭和三十三年十月一日）

戦前に建設された嵯峨野高女は、戦争中の資材難で結局、本館が建設されることなく戦後を迎えた。昭和三十年一月二十二日、増築費が承認され（書簡⑭）、本館の建設が進み、昭和三十三年十月一日、本館落成記念式典を迎えることとなった。式典は、報告に続いて祝辞があり、知事・

図８　知事（左）から感謝状を受ける矢代氏（右）

図９　新村氏（右）を案内する矢代氏（左）

蜷川虎三（一八九七～一九八一）から矢代仁兵衛に感謝状が贈られている。「若松」の記念植樹も行われた。新村出も来賓として出席、矢代仁兵衛の案内をうけながら、校舎・施設を見て回っている。

開校記念日を何時にするかは、各学校に委ねられており、嵯峨野高校は開校当初は、高校三原則発足の日である「十月十五日」を開校記念日としていたが、昭和三十四年以後、本館落成記念式典挙行日の「十月一日」に変更され、現在に至っている(12)。

（三）矢代仁兵衛氏頌徳碑除幕式（昭和三十六年八月二十七日）

本校創立の功労者である矢代仁兵衛氏を顕彰するため、胸像を設立しようとする動きは、戦前の嵯峨野高女の頃からあったが、実現することなく戦後を迎えた。嵯峨野高女は一旦廃校となり、昭和二十五年、復元されたことはすでに述べた。昭和三十三年、開校以来の懸案であった校舎増築（本館の建設）も完了し、顕彰碑設立を含めた造園建設に向かって同窓会・育友会が動き始める。昭和三十四年四月、庭園の設計は、当時京都府教育委員会文化財保護課技師の中根金作（一九一七～九五）に依頼された。矢代仁兵衛は胸像設立を固辞し、代わって碑の表に矢代仁兵衛筆の「道」の一字が刻され、裏面には頌徳文の青銅銘板がはめ込まれることとなった(13)。頌徳文の作成にあたっては、片岡仁志、中南忠雄、新村出、久松真一（一八八九～一九八〇）が協力している。昭和三十六年八月十七日、地鎮祭が行われ、八月二七日、除幕式が行われた。除幕式に参列した人々に記念品として徳力富吉郎（一九〇二～二〇〇〇）になる版画・絵葉書三葉が配布された。式後、図書館にて矢代仁兵衛に感謝する会が催され、関係者から祝辞や回顧談が述べられ、それらは、翌年昭和三七年十月に『嵯峨野の道』と題して出版されている。新村出は「老人の道話」という題で祝辞を記している。

図 10　「道」（矢代仁兵衛揮毫）

図 11　「道」（絵葉書・徳力富吉郎刻）

おわりに

校歌が制定された当初は、制定にまつわる様々な話が伝えられたに違いない。それらはやがて忘れ去られてしまい、校歌は、歌詞と楽譜のみが伝えられて行くことになる。しかし、校歌制定に関わった先人たちの思いや願いを知れば、校歌に対する見方も変わってくるのではないだろうか。

新村出の写真の発見に端を発し、團伊玖磨の楽譜、新村出の色紙、新村出等の書簡等々、次から次と資料が見つかった。今回、校歌制定の経緯を記述することができたのは、偶然の賜物と言ってよい。

本文には記さなかったが、遺憾の念を禁じ得ないことがひとつだけある。昭和二十九年十二月十八日付、新村出宛中南忠雄書簡の中に「猶先日歌詞御染筆に就いても御無理申し上げ候處是亦御快諾賜はり有り難く御禮申し上候就いては用紙御言葉に甘え使を以つて御届け申し上げ候何卒宜敷御承了上候」（書簡⑫）とあるのだが、新村出が染筆した校歌が見つからないのである。今後、見つかることを期待するばかりである。

最後になったが、本稿執筆にあたり、財団法人新村出記念財団・重山文庫での資料調査の便宜を得た。同財団の前理事長の堀井令以知氏は、この十数年来、社会人講師として嵯峨野高校にお招きし御講演いただいた。われわれが初めて新村出記念財団・重山文庫を訪ねたのは、平成二十四年三月一九日のことであった。その時、対応していただいたのが、堀井令以知氏であり、御健在であったが、平成二十五年三月十日、逝去された。御冥福をお祈りするばかりである。堀井令以知氏のみならず、現理事長の玉村文郎氏、常務理事で新村出令孫の新村祐一郎氏、職員の入江貞子氏からも多岐にわたる御教示をいただいた。また、公益財団法人陽明文庫 理事・名和修氏には、新村出の書簡の判読について絶大な御助力をいただいた。併せて深謝する次第である。

注

(1) 京都府教育研究所編『京都府教育史　戦後の教育制度沿革』（京都府教育研究所、一九五六）一四七～一五一頁参照。

(2) 戦後の学制改革により京都市立中学校に転用された府立の中等学校は、一中（現、洛北高校）、二中（現、鳥羽高校）、五中（現、桂中学校）、嵯峨野高女（現、嵯峨野高校）の四校であるが、一中・嵯峨野高女は昭和二十五年に、二中は昭和五十九年に府に返還されたが、五中は返還されることなく現在に至っている。

(3) 川口靖夫『『西田幾多郎』と『嵯峨野高等女学校』―矢代仁兵衛、片岡仁志の『念願』―」（『京都府立嵯峨野高等学校　研究紀要』第十四号所収、二〇一三）参照。

(4) 嵯峨野中学校の生徒は、前年の昭和二十四年に新設されていた蜂ケ岡中学校に収容された。昭和二十五年、洛北・嵯峨野が復元されたことに伴い、学区編成が実施された。洛北・嵯峨野ともに、昭和二十五年の開校時には第一学年と第二学年のみで第三学年は存在しない。第二学年の生徒は、昭和二十四年度には、洛北・嵯峨野以外の公立高校に在籍していたが、この時に、高校三原則のもと、強制的に編入させられたのである。

(5) 川口靖夫「京都学派と嵯峨野高校」（『書論』第三十九号所収、二〇一三）。

(6) 東辻保和「新村出先生と校歌」（『泰山木　新村出記念財団設立二十五周年記念文集』所収、二〇〇六）。

(7) 伊吹文明氏に「校歌に対する思い」をメールでお尋ねしたところ、政務多忙（国会会期中）にもかかわらず、即刻、返信をいただいた。その返信メールに拠る。

(8) 『嵯峨野高校新聞』第二十号（昭和二十九年十月十六日発行）は、「京都府立嵯峨野高校創立五周年記念号」として発行され、その中に事業内容及び予算が記されている。

事業内容

○校旗調製費　二〇・九〇〇
○校歌作成費　五〇・〇〇〇
（作曲、並に発表会演奏会費を含む）
○視聴覚教育充実費
テープ・レコーダー　六五・〇〇〇
幻灯器　一九・五〇〇
スクリーン　八・五〇〇
格納箱　一五・〇〇〇
設備費　一〇・〇〇〇
（遮光装置・電源設備等）
○記念式典費　一三・〇〇〇
この他に（案内・接待・会場など）
○生徒会記念行事補助　三・〇〇〇
○記念新聞補助　五・〇〇〇
○印刷通信事務費　四・九五九
計　二一四・八五〇

(9) 團伊玖磨『続・パイプのけむり』（朝日新聞社、一九六七）二七四頁。

(10) 永田和宏「新村出の校歌」（『もうすぐ夏至だ』所収、白水社、二〇一一）二〇六～二一一頁。

(11) 昭和三十四年四月、初代校長の中南忠雄は洛東高校校長に転任し、第二代校長として籔田尚一が赴任した。籔田尚一が新村出に宛てた昭和三十七年三月一日の卒業式の招待状が残っている（書簡⑳）。昭和三十五・三十六年の招待状は残っていないが、招待状が送られていることは容易に想像がつく。つまり、中南忠雄異動後も新村出と嵯峨野高校の関係は続いているのである。

(12) 京都府下の公立高校の創立記念日・記念日決定理由・記念日決定期日に関しては、『京都府公立高等学校長会結成50周年記念誌』（京都府公立高等学校長会、一九九九）三七五～三七六頁に一覧が掲載されている。

(13) 「矢代仁兵衛氏頌徳碑」碑文矢代仁兵衛氏頌徳文は、以下の通り。

本校は元京都府立嵯峨野高等女学校と称し昭和十六年四月京都市の紳商矢代仁兵衛氏の篤志によつて創立を見るに至つたものである　氏はつとに育英の志厚く当時の府民の要請に応え清新高雅な学園の創設を念願せられ経費の全額を寄附せられたのである　和敬静寂は氏の信条でありその人格的影響はおのずから本校校地の選定校舎の建築また誇るべきわが校風の中にこれをみることができる　本校創立以来の同窓生ならびに育友会等関係者はかねてより相謀り氏の頌徳記念事業を計画して来たのであるがようやく氏の応諾を得てここに氏の筆跡「道」を石に録し悠久なる校運の隆昌と高邁なる人士のこの地により出でんことを祈念せられる氏の精神を景仰しこれを永く後世に伝えるものである

昭和三十六年八月

京都府立嵯峨野高等学校建之

《資料編・書簡一覧》

［凡例］

＊これは本稿を作成するにあたり参考とした書簡（封書・葉書）の一覧である。新村出宛書簡は「新村出記念財団重山文庫」、中南忠雄宛書簡は「京都府立嵯峨野高等学校」が所蔵保管している。東辻保和宛書簡は東辻保和氏の個人蔵である。

＊書簡に記されている日付順（消印も参考）に時系列で並べてある。

＊年月日・書簡名称（便宜的に記す）・（消印：宛先：差出）、本文の順に記した。また、必要に応じて［付記］を記した。

＊判読不能箇所は■とした。

＊書簡を判読するにあたり、公益財団法人陽明文庫　理事・名和修文庫長の御助力を仰いだ。記して感謝する。

＊書簡の掲載に当っては、関係者各位の承諾を得ていることを付記しておく。

①昭和二十五年十月十三日・新村出宛矢代仁兵衛封書（折紙）（消印：中京二五・一〇・一四　宛先：上京区小山中溝町一九　新村出様　差出：京都市右京区龍安寺住吉町十五　矢代仁兵衛）

拝復

秋光の佳節愈〻御清安の段目出度く存じ上げ候平素は洵に御無音に打ち過ぎ殊に去年秋娘佳婚の節にハ有難き御詞を頂き早や一年にも相成り候然る所一昨〻日ハ折角御光来被下候ひしも公用とハいへ外出いたし居りその上何の御摂待も仕らず何とも申し訳も無之候かね〴〵より御話もありこの機をお待ち申し居り候次第にてかゝること少しにてもお間に合ひ候はゞ吾等の日頃の甲斐もありこの上なく本懐に存入候御気分も向けば何回にても御遠慮なく御立寄り御来遊下され度く御待ち申し居り候皆様によろしく

十月十三日夜　仁兵衛　拝

新村出老先生様

［付記］新村出氏と矢代仁兵衛氏との交遊が何時から始まったのかは不明であるが、少なくともこの書簡から昭和二十四年にはあったことがわかる。

②昭和二十九年九月二十二日・東辻保和宛新村出封書（原稿用紙二枚）（消印・宛先：無し　東辻保和雅契　咲覧　差出：新村出）

昭和二十九年九月二十二日洛北紫野高等学校音楽室に東辻保和作詞奥村一作曲の校歌を聴きて詠める鄙歌五首

校歌うたふをとめをぐなの合唱は紫野邊の空にひびかふ

小春日の紫野邊をわがゆけばをとめをぐなの合唱きこゆ

比叡みゆる高みに立てる樂堂にむらさきにほふ校歌ひびきぬ

きゝほれてふたゝびとこふアンコルの老いの拍手のおと低くして

感激の老いのなみだのさきだちて吾れが言葉も低かりにけり

七十九叟　重山逸人

［付記］本書簡は、東辻保和氏が所蔵するもので、財団法人新村出記念財団設立二十五周年記念文集編集委員会編『泰山木』（二〇〇六）所収の東辻保和論稿「新村出先生と校歌」より引用した。

③昭和二十九年十月九日・中南忠雄宛新村出封書（便箋五枚）（消印：西陣二九・一〇・九　宛先：右京區嵐山電車線＝常盤驛附近　嵯峨野高等學校々長　中南忠雄殿　惠展　差出：上京区小山中溝町十九　新村出）

本日ハ貴校五周年祝賀會への御案内状いたゞきありがたう存じました。

参上いたしたさハ山々ながら本月初めより俄かの冷氣のため風邪ニかゝり咽喉を痛め静養中なので、臥床中でありますのでとてもこの十五日あさまでに本復いたし参上の儀ハおもひもよらず、ざんねん千万でございますが、不参失礼させていたゞきます。たゞ幸に先月以來再度嵯峨野逍遙をいたし又貴校のふんゐ氣にもひたり且又風土史蹟などを大観いたしなどいたし、校歌試作の高興正に到り腹案やゝ進み、精神氣魄いささか昂張し來りし心地いたしてまゐりましたのでこの神慮ともいふべき契機を捉へて、病間、客を謝絶し一向専念の上、修辭に意を盡くしつゝ構想を完うし、天來の妙趣を綴り申して、各位の御期待に反かざらむやういたしたいと存じてをります。かくて矢代氏の高嘱にも應へたくと存じてをりますから、何卒内外諸賢に然るべく右の如き心地と覚悟とをおつたへ下さるやう懇願いたします。但し、どんなものがとびいだすか、自分ニもわからず安危の間を一毛一憂中でございます。とにかく本月末までには、試作案を一往お目にかけ得るかと存じてをります。先ハ御挨拶まで。　早々

昭和二十九年十月九日　新村出

中南忠雄様

石川春之助様

矢代氏にだけハ、この拙簡お目ニかけておき願ひます。

［付記］中南忠雄は嵯峨野高校初代校長、石川春之助は育友会会長。なお、本書簡は『新村出全集』第十五巻七〇五頁に掲載されている。書簡本文八行目「心地いたしてまゐりましたのでこの神慮ともいふべき」の箇所を『全集』は「心地いたしてまゐり候。この神慮ともいふべき」と判読し、同じく最終行「矢代氏にだけハ、この拙簡」の箇所を『全集』は「矢代氏にだけハこの拙い句」と判読しているが誤りである。

④昭和二十九年十月二十九日・中南忠雄宛新村出葉書（消印：西陣二十九・十・二九　宛先：右京區嵯峨野　嵯峨野高等學校校長室　中南忠雄様　差出：上京区小山中溝十九　新村出）

先般矢代氏ニも申出でゝおき候が、近々校歌の試作初稿をお見せ申したく、又同時に作曲のことにつき、御相談もしてみたく候間、十一月一日（月）、二日（火）あたりの午後前ぶれのお電話ニて御照會の上、御來談下さるやうおふくミおき可被下、ともかくもいろ〳〵臨機の突発の事も起るやもしれず候まゝ念のため午前中お電話願上候　早々

⑤昭和二十九年十一月二日・中南忠雄宛新村出葉書（消印：西陣二九・一一・四　宛先：右京區嵯峨野　嵯峨野高等學校々長室　中南忠雄様　差出：上京区小山中溝町十九　新村出）

過日ハ電話ニて申上候如く、小生の方ハ決して急ぐ儀ニハ無之、実ハ世外人とて暦日を忘れし氣味ニて、文化の日前後を念頭ニおかざりし失態甚だ赧顔の至ニ存候むしろ六日七日の土曜日曜両日をすぎ来週、月、火等の午後早々にでも、一往お電話ニて御照會の上、御出向のやう願置候　早々

⑥昭和二十九年十一月九日・新村出宛中南忠雄封書（折紙）（消印：太秦二九・一一・九　宛先：市内上京区小山中溝町　新村出先生　御侍史　差出：市内右京区常盤　京都府立嵯峨野高等学校　中南忠雄）

拝啓爽秋の候先生には益ゝ御清適の段衷心御慶申し上げます　扨て先日は参上致し豫て御願ひに及びました本校ゝ歌として御立派なる御玉詞賜はり且つ本校の為過分なる御芳志の数ゝ拝承いたし誠に感激の至りに存じたる次第で御座います　早速矢代様にもお目にかけ又父兄會現員諸氏にも披露いたし先生の御芳志の程も御傳へ致しましたる所皆様御詞と申し又先生の御懇情と申し立派なる校歌を得ましたる段心より喜んで頂き

ました次第で御座います　元々生徒の魂たるべき校歌のこととて若し先生を煩はすを得ば唯それのみにて我々の喜びと存じ厚かましく御願ひに及びました所　御快諾賜はりしのみならず御誠意溢るる数々の御心遣ひ賜はりました事ハ返す〳〵一同の感激致します所で御座います　就いては早速御挨拶申し上げたく存じましたが小生本日より會議の為九州方面へ出張致します為失禮いたしますが帰京後何れ御拝眉の上萬々御禮申し上度き存念で御座います　尚作曲に就いても先生を煩はし恐縮に存じますが何卒宜敷御願い申し上げます　末筆ながら向寒の節　先生には一層御大切の程祈上候　以上取敢へず御禮方々御報申上げる次第で御座います　敬具

十一月九日　中南忠雄

新村　先生　御侍史

⑦昭和二十九年十一月二十七日・中南忠雄宛新村出封書（便箋三枚）（消印：上京二九・一一・二八　宛先：右京區嵐山電車線常盤驛前　嵯峨野高等學校々長室　中南忠雄様　御直披　差出：京都市上京区小山中溝町十九　新村出）

一昨日ハ矢代氏及石川氏御同伴ニて御來訪、御懇篤なる御礼ニ接し甚だ恐しゆくニ存候其節作曲ニ付配慮をたのみし諸井三郎より何等通信ニ接せず心もとなき旨申上置候處本日廿七日午後、同人妻（小生のめひニ當るもの）より葉書まゐり、延引申候事情判明いたし安心いたし候要旨に云へるハ小生より音信ニ對する返書大いに延引ニ及べるハ、拙簡と行きちが［ひ］御主人、一週間ほど四國に主張して（十一月）十九日帰京せしところ、非常に疲労し休養中、不在中の用事公私共ニ繁忙中なる為め返信おくれ■■■■、小生よりの依頼ニつきて考慮罷在候ニつき、遠からず返事をよこすといふ次第ニつき、云々、とのことにつき、その中ニ指示いたしよこすことと存居り、何卒右の儀、お序に矢代氏及石川氏ニもそれぞ〳〵御鳳聲下され度、右得貴意度如斯ニ候也　敬具

昭和二十九年十一月二十七日夜　新村出

中南忠雄様

石川育友会長の寓所及その完全なる姓名お序での節ニてよろしく候また御一報被下候ハバ幸ニ候

［付記］諸井三郎（一九〇三～七七）は、新村出の親戚筋の作曲家。昭和四〇年から五一年まで東京都交響楽団音楽監督。昭和二六年に京都市市歌（藤山於菟路作詞）を作曲している。

書状六行目最初、「ちが御主人」の二字目と三字目の間、脱字があると考え「ちが［ひ］御主人」とした。

⑧昭和二十九年十二月一日・中南忠雄宛新村出封書（便箋三枚）（消印：上京二九・一二・一　宛先：右京區嵐電線常盤驛西　嵯峨野高等學校々長室　中南忠雄殿　至急恵展　差出：上京区小山中溝町十九　新村出）

本日漸く諸井氏より別紙の如く委嘱候補の作曲家、二人の姓名を推薦いたして参りましたが、小生よりハ重ねてその二人の住所と職名（公私いづれか）とを至急しらせてくれるやうたのんでおきました。いづれも小生未知未識にて、斯界の新人と存候が諸井氏の回答、頗る簡単ニして小生の如き斯道のこと斯界の人事、共々全く知らぬものにとりては困却の至りではありますが、住所わかり次第、何とか貴方よりお手をまはして戴けますまいか、何卒御考慮を願ひたうございます。或ハ紫野高校長等ニ私的ニ、電話ニてでもあちら（紫野）にてハ如何なる手順ニて、たのみこみ又作曲出來せる月日（期日）等おきゝなされては如何でせうか。又別に小生の知人を經て尋ねてみようともおもつてゐます。右とりあへず中間報道等のミ

29（ママ）十二月一日　新村出

中南忠雄様
追申
作曲家二名（柴田、團の二氏）のうちまづ前者を先きにいたし、前者拒否せしとき、後者ニ及ぶやうしては如何かと存候がいかなことかにや、これも併せて御考置可然候　早々

⑨昭和二十九年十二月四日・中南忠雄宛新村出封書（便箋三枚）（消印：西陣二九・一二・五　宛先：右京區常盤段ノ上町十五　嵯峨野高等學校々長　中南忠雄殿　差出：上京区小山中溝町十九　新村出）

中南忠雄様　侍史
一昨日ハわざ〳〵お使を以て御送りの御書状及諸井氏よりの書面正ニ接手仕候、本日別信葉書の如く諸井氏より作曲者の事申し参り候につき不取敢貴覧ニ供し候御考慮の上どちらかに御高嘱御開始有之度候諸井氏より作詞者（新村）ニ向け推擧ありしニつき、御依頼申上候段御附記ありり候やうなされては如何かと存候、作曲家二氏ニつきては小生何らしる所なきも、いづれを選ばるゝかも何ら意見無之候も、若し〳〵京都市内の音楽家等に就きて御相談の上、御評議ある方むしろ妥當かと存候、作曲の期限などに関しても御熟慮可有之も自然なるべくや。尚又清書の上、假名等を附して當該作曲家におたのミニなる前ニ爲念拙稿檢閲再吟味もいたし度、近日（御都合よろしき日時）貴所又ハ副校長又ハ國語主任の教師御來訪被下候やう希望申上候　敬具
昭和二十九年十二月四日（土）　新村出

⑩昭和二十九年十二月十二日・中南忠雄宛諸井三郎封書（便箋一枚）（消印：中野二九・一二・一三　宛先：京都市右京区常盤段ノ上町　京都府立嵯峨野高等学校　中南忠雄様　差出：東京都中野区千光前町二十　諸井三郎）

前略　御手紙拝見致しました。新村様へは既に御伝えしましたが、依頼者が高校ですから、予算等率直におっしゃって御依頼になれば結構と思います。団（ママ）君へは私の名刺を同封しておきますからよろしく御使用下さい。立派な校歌の出来ますことを祈っております。では取急ぎ御返事のみにて失礼いたします。
十二月十二日　諸井三郎
中南忠雄様

⑪昭和二十九年十二月十六日・中南忠雄宛新村出封書（四百字詰原稿用紙三枚）（消印：■■二九・一二・一七　宛先：右京区常盤　嵯峨野高等學校長中南忠雄様　恵展　差出：上京区小山中溝町十九　新村出）

團伊玖磨氏ニ作曲を依頼する書状
拝啓突然ながら一書さしあげることをお許し願ひます。或はすでに京都市（右京区）嵯峨野高等学校長中南忠雄氏から諸井三郎君（小生近親の姻戚）の推薦及び小（ママ）生からの懇願に由つて、このほど小生が同校学生のうたふ校歌を作りましたについては、貴下の御作曲を煩したい旨の切實なるお願ひを申しあげたかと存じます。小生は元々音楽のことに至つて疎く、作曲及楽譜のことには無智につき、最初より件曲の方には無頓着に、ただ小生の古典趣味の上より、且又京都の地方性の上より、典雅にのみ作詞をいたしましたので、その結果、作曲上御迷惑の儀もおありかと存じますが、何卒同校の爲に優秀な詞曲となりて永く師徒父兄等を感喜せしめ、嵯峨野の雅致と相俟つて、京都内外遠近に響かせたいと念願いたしてをるやうな次第でありまするので、御繁激をも顧みず、特に懇願申しあげるわけてございます。冀くは、この未熟なる小生の処女作たる校歌をして、御無理かと存じつゝも、貴下の御協力に依りて（小生としては僭越の至りながら）詞と曲と双美の域に達せしめるやう格段の御厚配をねがふのでございます。實は小生学士院出席など便宜東上の節に、拙作歌詞携提の上、

学校長とも同道拝趨もいたし、或は更に諸井氏にも賛助を乞はんかなど、私かに夢想をいたり居りましたが、この嚴冬中は殊に老齢の旅行は堪へがたきのみか、他の人々にも亦年末にてもあり、出動懇願の儀叶はざる事、御諒察にあづかることにいたし、略儀ながら、書面を以て、上記の中南校長よりの御願ひに対して聊か力添へをいたしたいと存じました次第でございます。何卒学校長の願意をお容れ下さいますやうに。敬具

昭和二十九年十二月十六日　新村出

團伊玖磨（ママ）様

（右、初めから原稿を作らず、いきなり構文してしまつたのを、逆にコピイをとらせたるため、宅の学生にかゝせましたので、文致のとゝのはぬ所が多うございますが、面倒ですからこのまゝにいたします。）出

先般ハ校歌作曲の事ニつき御來談ニあづかり候處その後いろ〳〵の事情重なり候ため非常ニ延引いたし申訳なく候本日、別紙コピイの如く團氏宛依頼状を十二月十六日附、明十七日あさ速達便を以て作曲者ニ向け發送いたすはずにいたし候間さやう御承知置き下されたく候　先ハ右得貴意度如斯ニ候也　早々

昭和二十九年十二月十六日夜　新村出

中南忠雄様

［付記］『新村出全集』第十五巻七〇六頁の「団伊玖磨宛」書簡は、新村出が書生に筆写させたこの書簡を元に掲載されていると思われる。明らかに書生が誤写したと思われる部分は、『全集』掲載時に訂正されている。書状の三行目「小生からの懇願」を「学生からの懇願」に、書状の最後「團伊玖麿」を「團伊玖磨」に、の二箇所である。

なお、消印の部分が切り取られているため、投函先は不明であるが、前後の書簡から「上京」か「西陣」のどちらかである。

⑫昭和二十九年十二月十八日・新村出宛中南忠雄封書（折紙）（宛先：新村出先生御侍史　差出：京都市右京區常盤段ノ上町十五番地　京都府立嵯峨野高等學校長　中南忠雄）

拝啓寒氣頓に加はり候處先生には其の後御清祥にて御過し披遊候趣衷心御慶び申し上げ候　扨て先日は校歌作曲依頼の件につき御邪魔申し上げ種ゝ御配意賜はり有り難く存候　又此の事に関し昨日御親書頂き一方ならざる御配慮の程　重ゝ感謝の外無之候　実は先日御出會致し御決定を頂き候直後先諸井先生に当方の意志並に事情等一度御相談申し上ると共に豫め御依頼申し上げ度速達を以つて御手紙差し上げ候處折返し團先生への紹介状を添へ御了承の御返書頂き候處先生の御親書頂くより数日前團先生宛正式御依頼状差上候次第に候未だ御返書は到らず候へ共諸井先生の御紹介と申し特に先生の御懇篤なる御言葉添を頂きしことゝて必ずや御承引賜はることと信じ然る重ゝの御配慮重ねて御厚禮申し上げ候猶先日歌詞御染筆に就いても御無理申し上げ候處是亦御快諾賜はり有り難く御禮申し上候就いては用紙御言葉に甘え使を以つて御届け申し上げ候何卒宜敷御承了上候　先は取急ぎ紙上失禮ながら御報告並御禮まで申し上げ候　年末も折迫り且は寒冷の候　先生には御いとひの上　益ゝ御多祥の程切念仕候　敬具

昭和廿九年十二月十八日　嵯峨野高等学校　中南忠雄

新村先生　御侍史

［付記］封書に宛先が無いことから、関係者（中南忠雄あるいは中南忠雄の命を受けた人物）が直接新村出へ持参したものと思われる。

⑬昭和三十年一月十五日・中南忠雄宛新村出葉書（消印：上京三〇・一・一六　宛先：右京區嵐山電車線常盤　嵯峨野高等學校　中南忠雄殿　差出：上京区小山中溝町十九　新村出）

新年お目出たう存じます。さて旧臘中、作曲家（團氏）より何等かの返答がありましたか、當方には直接ニも間接ニも、何とも申してきませんから、諸井氏の方への年賀葉書のあとの添へ書きに、そちら（諸井）よりも、一言あちら（團氏）へよろしく言葉添へをして、承諾してくれるやうに希望すると、申してやりました。十日より以前（五日以後）です。これハまだ何の手ごたへハありません。いさゝか氣がゝりニもなり一言申上げておきます。

昭和三十年一月十五日成人の日の夕

⑭昭和三十年一月二十三日・中南忠雄宛新村出葉書（消印：西陣三〇・一・二三　宛先：右京區嵯峨野常盤駅前常盤　嵯峨野高等學校々長　中南忠雄様　差出：新村出）

本日、多分そちらにも團氏から返事がまゐりしことゝ存候が、むろん承諾であり、（返事がおくれたのは、新曲の「オペラ」構成中なりしためと云）二月の初めころには新作曲（校歌の）を送る筈との事、そのあとにて、旅行のついでに、入洛來訪の事もかきそへてありました。すぐお宅へ電話をとおもひ、帳面をくりましたが、お名前がみえず、そのまゝになりましたので、この葉書をさし出した次第、これが到着前、すでに御存じになつたらうと想像しましたが。昨日の夕刊、貴校増築費のことが承認された由を報じ、私かに慶祝してハガキを以て賀辞を呈せんかとおもひて翌朝、この吉報ニ接し、老人甚だうれしく存じました。

⑮昭和三十年一月・中南忠雄宛團伊玖磨葉書（消印：神奈川葉山三〇・一・二一　宛先：京都市右京区常盤段ノ上町十五　京都府立嵯峨野高等學校　中南忠雄先生　差出：神奈川県葉山一色　團伊玖磨）

明けましてお目出度う存じます。過日は御丁重なる御手紙有難う存じました。校歌の作曲大へんおくれましたが今月末か二月早々にお送り申し上げますつもりでございます。先づは御返事まで。

⑯昭和三十年三月三日・中南忠雄宛新村出封書（便箋二枚）（消印：西陣三〇・三・四　宛先：右京區嵐電常盤驛　嵯峨野高等學校々長　中南忠雄様　差出：上京區小山中溝町十九　新村出）

本日ハお使を以て明後六日の貴校卒業式への御招待を受け御芳志ありがたう存候、早朝にてもあり参上の儀ハむつかしかるべく失礼の段おゆるし可被下候暖氣の節にてもかく早き時間ニハ、真夏ハともかく拝趨の儀不可能ニ近きこと何卒御寛恕可被下、よし参上祝賀申すといたし候とも御式終了後、貴室までにてもと存居候正午以後ニ成ることを御宥るし希上候、とにかく團氏よりの作曲未着のこと、御同憂の至ニ候ももハや六日の御用ニハ立ち申すまじく遺憾無上ニ存候小生より一電をともおもひつきしもやハり無効果なるべくと諒らめ申候かへすゞもざんねん千万ニ存候　早々拝合（ママ）

昭和三十年三月三日　新村出

中南忠雄様

［付記］書状の最後、「早々拝合」は「早々拝答」の誤りか。

⑰昭和三十年四月十二日・中南忠雄宛新村出葉書（消印：上京三〇・二・一三　宛先：右京区常盤段ノ上町　嵯峨野高校々長　中南忠雄様　差出：上京区小山中溝十九　新村出）

本日ハ電話にて失礼申上候積日の鬱憤もだしがたく、如何ニいたさば、よろしかるべきかと苦慮もいたし、又善處の妙案もがなと、對策をも練りたく、甚ださし出がましくハ存じ候ひしも、率直ニ愚意の一端を洩らしあげ候次第ニ有之候間、決して敢て遂行をいそぎし儀にてもなく候條

何卒良く〳〵御熟議の上ニて御相談を伺ひ度も有存じ居候　早々

⑱昭和三十二年正月吉日・中南忠雄宛新村出年賀状（消印：京都北三〇・一・二五　宛先：右京區常盤段ノ上町一五　中南忠雄様　差出：京都市北區小山中溝町十九番地　新村出）

謹賀新年
昭和三十二年正月吉日
京都市北區小山中溝町十九番地
新村出
（添え書き）
昨秋ハ御厚意の数々、又寫真の御配慮ありがたく存じます。殊に校歌の合唱ニハわれながらその音調に感激し感泣いたしました。
即興一首
わが作とおもハれぬまでその調のよく整ひてこゝろ高みぬ

⑲昭和三十二年三月一日・中南忠雄宛新村出葉書（消印：京都北三二・三・一　宛先：右京区嵯峨野　府立嵯峨野高校　中南忠雄様　差出：北区小山中溝十九　新村出）

拝復本日ハわざ〳〵お使にて本月四日の貴校卒業式へ御招待を蒙りましてありがたう存じます。然る處昨今の寒さにては拝趨の儀むつかしかるべく、何卒不参の儀御寛容願ひます。いづれ五月頃ニもならばゆる〳〵参上もいたしえらるべく、近頃ハ稀に、よんどころなき為ニ、暖和の日にハ出ることもありますが、今度ハおゆるし希ひます。

⑳昭和三十七年二月二十日・新村出宛籔田尚一封書（折紙）（宛先：新村出様　差出：京都府立嵯峨野高等学校長　籔田尚一）

拝啓
早春の候いよ〳〵御健勝のことゝお慶び申し上げます
さて来る三月一日（木）午前十時より本校講堂において本年度卒業式を挙行いたすことになりました
嵯峨野の学び舎に勉学の春秋を重ねこゝにめでたく卒業を迎えました生徒たちのためぜひとも御繰り合わせの上御臨席を賜り卒業生の新らしい門出に一層の光彩をおそえ下さいますようお願いかたがた右御案内申し上げます
昭和三十七年二月二十日
京都府立嵯峨野高等学校長　籔田尚一
新村出様

［付記］封書に宛先が無いことから、関係者（籔田尚一あるいは籔田尚一の命を受けた人物）が直接新村出宅へ持参したものと思われる。